

正倉院文書研究の来し方

正倉院事務所の北でございます。一言ご挨拶させていただきます。本日は秋たけなわの文化の日に「正倉院学術シンポジウム」を開催していただき、ありがとうございます。また、ご多忙の最中にパネリストとなつていただいた四人の方々には、御礼を申し上げます。私はこのシンポジウムを主催してはおりませんが、テーマが「正倉院研究の現在」ということでありまして、またその発表者も奈良国立博物館と正倉院事務所、そして東大寺と、日頃から相互に関係の深い方々であり、開催のご案内を差し上げたのも限られた方々でしたので、正倉院事務所長という肩書きをもつ私がこの場でご挨拶申し上げることをご理解いただきたいと思います。

本日のテーマは「正倉院研究の現在」ということですが、正倉院に関する研究の最先端はどんなことになっているのか、皆さまの知見をご披露いただいて、それを巡っているいろいろなとまとめて行こうということであろうと思います。

私のもともとの専門は文献史学なので、正倉院文書の分野で研究の流れというものを私的に振り返ってみようと思います。私が勉強を始めた若いころ、三十数年前のことになりますが、そのころ、昭和十二年に発表されました北山茂夫氏の西海道戸籍を用いた肥君猪

北 啓 太

手という郡司、というか大家族の家族構成の復原というものが、燦然と輝く金字塔として取り上げられていたと思います。その業績に引き続くようなかたちで、戸籍や計帳、あるいは正税帳、計会帳といった律令国家の、国家としての性格を直接に語ってくれるのではないかと期待されたものについて、その復原と精緻な検討が続々と積み重ねられてきていた時代だと思えます。これらは、こんにちの言葉で言えば正倉院文書の一次文書への着目であったと思います。それに対して、正倉院文書の写経所文書としての側面、つまり二次利用面に着目した研究は、これは戦前から続けられてきたのではあります。ここ十数年ほど、あるいは二十年ほどになるのでしょうか、こちらの研究が非常に盛んになってきております。正倉院文書研究会という学会が結成されました、『正倉院文書研究』という雑誌がほぼ年に一回刊行されており、その第一号に載っている論文は、ほとんどが写経関係の論考であります。この方面の研究は、細かく分かれてしまった写経所の帳簿を種々の証拠から接続を検討して復原する、つまり細かい作業を行って、様々な断片的な資料を集めて、その膨大なデータの上に写経所とか造寺所などの活動の実態、あるいは事業の全体像、さらにそこから進んで天平期の



北 啓太 所長

仏教政策、あるいは国家論まで及んで行く、そういうふう発展しております。

今お話ししましたのは、正倉院文書に関する研究と正倉院文書を用いた日本古代史に関する研究、両方ですが、

正倉院文書そのものに関する研究についてさらに申し上げますと、正倉院文書の影印版の刊行とか、精緻なコロタイプの作成、あるいは原本調査の整理というのがその間に進んでおりまして、材料の提供が広く学界に対して行われるようになった、いわば研究の環境がかなり進んでいるのであります。また原本調査に携われた先生方が大学で正倉院文書に関する演習を開講されまして、それが原本の状態に即して分析するという研究の広がりを感じているということも明らかに言えると思います。また一方で、幕末以来の正倉院文書の整理過程に関する研究も進んできております。このように正倉院文書の基礎的部分に関する学界の所見はかなり進んできているわけでありまして、こういったことが正倉院文書を写経所文書として分析するという研究の発展に深く関わっていることは言うまでもないことだと思います。まことに正倉院文書の研究というのは、この二、三十年の間にかかなり大きな変化を遂げていると行って過言ではないと思います。

また、日本古代史の研究を広く見渡してみましても、この間に木簡とか漆紙文書という出土史料が続々と増えており、一方『続日本紀』などの典籍に関する研究も一定の成果を挙げている。正倉院文

書の研究もそれらと共に進展しております、日本史の学問、あるいは史料学というものに貢献していると言えるのだと思います。

冒頭のご挨拶が長くなりましたけれども、ともかく、文書の分野一つをとってみてもこうした大きな広がりがあるわけですので、いま文書に代表させてお話しさせていただきましたが、正倉院に関する研究の先端がどうなっているのか、今日は幾つかの分野からご報告をいただいで、活発な議論をお願いしたいと思います。それが正倉院についての学術的な研究の発展につながれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

(きた けいた 宮内庁正倉院事務所長)